Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】日中同形二字漢語「人間」の意味変化について

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2020-10-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 楊,琴
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/5496

（別紙１）

論　文　の　内　容　の　要　旨

氏　　名	楊　琴		
論文題目	（外国語の場合は、日本語で訳文を（　　）を付して記入すること。） 日中同形二字漢語「人間」の意味変化について		
審査委員	区　分	職　名	氏　名
	委員長	教授	鈴木広光　　印
	委　員	准教授	尾山　慎　　印
	委　員	教授	野村鮎子　　印
	委　員	教授	大平幸代　　印
	委　員	本学名誉教授	千本英史　　印
	委　員		印

内　容　の　要　旨

本論文は「日中同形語」の二字漢語のうち、「人間」を取り上げ、意味変化のプロセスの端緒を文献学的アプローチによって捉えることと、背景となる歴史的、文化的事情との関係を明らかにしようとするものである。

古代中国の漢籍における「人間」は、〈人々が生活する空間〉の意に始まり、〈人の住む空間・世俗・民間〉の意味で用いられていた。仏教が中国に伝来して以降、漢訳仏典では「天上・地獄」と対置される〈人間界・六道の一つ・世の中・この世〉などの意味でも、幅広く使われている。「人間」の〈この世・世の中・民間・俗世〉といった〈空間〉概念の意味に、中国の仏教受容によって、仏教の典籍でよく用いられる「六道の一つ（人間界）」といった〈空間〉概念の意味が付加された。しかし、唐代の不空が訳した経文には「人間之骸」という表現が見られ、「人間」が「骸」という身体語彙と組み合わせられることで、その内包する〈ヒト〉の意味が浮き彫りにされている。宋代以前の他の文献では、「人間」が〈ヒト〉そのものを意味する例を見出すことができない。中国における「人間」は、漢籍での使われ方が漢訳仏典に先立って定着していたことにより、〈空間〉概念の意味で用いられるのが一般的であった。このような漢語「人間」が漢籍や仏典などを通じて日本にもたらされた後、〈空間〉概念の意味から分離して、日本語における独自の意味〈人界に住むもの・ひと・人類〉へと変化し、徐々に〈ひと・人類〉」の意味で定着するようになる。

第一章では　主に空海の『性霊集』や『本朝法華験記』で使用されている「人間」を、使用された思想的文脈に即して解釈した。空海が、漢文の修辞法（文のリズム感・上下語句の構成・対比修辞・文字数配置など）に因み、唐の不空に倣って「絶人間之腸」と類似する文型で記している。「人間」は「腸」という身体語彙と一緒に用いられることで、内包する〈ヒト〉の意味が浮き彫りになった。『性霊集』における「絶人間之腸」は、空海が「絶人腸」「人間之…」を踏まえて、新たに表現したものである。それは空海の表現意図にもとづく意味の拡張ではあるものの、条件が揃えば、他の文献でも同じ意味で使用される可能性を示している。

第二章では、平安時代以降の諸文献をジャンルごとに網羅的に調査し、日記・紀行では「人間」が認められないこと、説話集のうち、『発心集』の「人間」は出典を引き継いだ用法であること、『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』にみえる「人間」の意味は、明白に〈ヒト〉と解釈できないが、「心」「形」などの身体を表す語と合わせて用いられることで、〈世の中〉の意味よりも、「世の中に住むヒト」の意味が引き出されていることを示した。さらに時代が下って、『鴉鷺物語』『伊吹童子』『俵藤太物語』に〈ヒト〉を表す「人間」の用例がみられることは、室町時代にすでに「人間」が〈ヒト〉の意味で一般的使われていた可能性を示した。

第三章では、口語的なものから文語的なものまで、伝達目的に応じてスタイルが多様な唱導資料における「人間」を取り上げる。口語的スタイルの唱導では、僧侶や学識者だけに独占されていた難解な仏教思想を、それ以外の人々にもわかりやすい言葉で説く必要性が求められた時代に応じるように、〈ヒト〉と〈空間〉の使い分け（〈ヒト〉の意味の明示）が語法の上ではっきりと示していた。口語的スタイルの唱導で明示されていたのは、何度も本文を読んで理解するのではなく、聞き手が聞いてすぐに理解できるようにするためである。口語的資料にこのような特徴が見られることから、「人間」の意味変化とその広がりについて、二つの可能性を提示できる。ひとつめは、唱導に限らず、口語ではこのような明示化によって、〈ヒト〉の意味だけで使われるようになった可能性である。もうひとつは、唱導そのものが、新しい「人間」の意味（ヒト）の広がりの媒介になった可能性である。

第四章では、道元が『正法眼蔵』において、独自の表現手法によって「人間」という語が〈この世・世の中〉という意味と、それに内包される〈この世に住むヒト〉という意味とに分離したことについて指摘した。そして、この著作における「人間」の用法が、明晰且つ平易な表現を言語形式の上に実現する、という道元の言語思想を端的に表す事例であることを指揮した。この明晰で平易な言語形式の実現は、「人間」が〈ヒト〉を表すようになるための要因のひとつであることを示した。

第五章では、仏教説話集の『宝物集』の「人間」の意味を検討し、〈ヒト〉の用法が確認できることが、文献の成立年代を推定するための指標になり得ることを指摘した。『宝物集』三巻本だけに見える「人間ノ習」という表現は、覚一本『平家物語』や『とはずがたり』などにも見えるものである。これだけでは、〈世の中〉か〈ヒト〉か、明確ではないが、文脈をよく検討すると、ヒトの性質に近い意味で解釈できることが明らかになる。三巻本は、平康頼が生存していた当時のものでなく、覚一本『平家物語』や『とはずがたり』と近い時代のものであることを指摘した。

第六章では、『平家物語』のうち、成立文化圏の異なる延慶本と覚一本を比較する。「人間」+「界」という複合語は、覚一本には見られず、寺院文化圏との関係が想定される延慶本には確認できることを指摘した。「説草」における「人間界」と「人間」の使い分けが延慶本でも確認できる。覚一本における「人間」はその文体と合わせて検討すると、〈ヒト〉の本性を生き生きと描写するために用いられており、抽象的な〈空間〉の〈世の中・世間〉と解釈することは難しいことが判明する。『平家物語』の他に『太平記』にもともに〈ヒト〉を表す「人間」が確認されたことは、〈ヒト〉を表す「人間」の使用が、鎌倉後期～室町時代のある段階に、一般的に広がっていた可能性を示した。

以上の各章の検討と考察をもとに、日中同形異義語と定義される「人間」の意味変化が生じる契機として、次の四点を指摘し、結論とした。

（一）「個人の表現意図に帰する要因」―　空海や道元のように、使用者が既成の概念を拡張して表現しようとすることによる。

（二）「思想的背景の違いにもとづく要因」―　中国における仏教受容と、日本での漢籍と仏典受容の違いにより、中国では〈世間〉が一般、日本では〈ヒト〉の意味で用いられやすくなった。

（三）「社会的コミュニケーションの要請にもとづく要因」―　僧侶や学識者だけに独占されていた思想を、他の階層の人々にもわかりやすい言葉で説く必要があった。

（四）「日本語の言語運用に帰せられる要因」―　語構成や語法によって、内包する意味が引き出され確定される。当初は個人の表現意図によるが、継承されて定着する。

（別紙２）

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

氏　　名	楊　　琴		
論文題目	（外国語の場合は、日本語で訳文を（　　）を付して記入すること。） 日中同形二字漢語「人間」の意味変化について		
審査委員	区分	職　名	氏　名
	委員長	教授	鈴木広光　　印
	委　員	准教授	尾山　慎　　印
	委　員	教授	野村鮎子　　印
	委　員	教授	大平幸代　　印
	委　員	本学名誉教授	千本英史　　印
	委　員		印

要　　旨

本論文は、従来、日本と中国で対照言語学や言語教育の観点から意味用法の相違を指摘することに重点が置かれてきた同形二字漢語について、両言語における意味のずれがなぜ、どのように生じたのかを歴史的観点から明らかにするため、ケース・スタディとして「人間」の意味変化を論じたものである。本論文の特色および評価すべき点は、次の二つである。第一に、網羅的な文献調査と膨大な用例の解釈検討によって、意味変化の契機を捉えることに成功したことである。中国側の文献で確認される「人間」は専ら〈世間〉の意味で用いられており、〈世間〉が〈ヒト〉によって構成されることが自明であるがゆえに、この意味は顕在化していない。〈ヒト〉の意味が顕在化するのは、仏教が受容され、「人間」が「天上」に対置されるようになってからであるが、あくまで〈天上界に対する人間界およびそこに存在する者たち〉の意味にとどまる。ただし、語構成からも明らかなように「人間」には〈ヒト〉の意味が内包されているため、共起する語や特定の文脈や表現のもとでは、〈世間〉よりも〈ヒト〉の意味が前景化することになる。この瞬間を文献上で捉えることで、意味変化の契機は決して一元的なものではなく、個人の表現意図、文化的要因、コミュニケーションのあり方の変化など、多元的なものであることが明らかになった。第二に、変化の契機が多元的であることから、「人間」の意味用法が文献資料およびその言語表現の性質と密接に関わるものであり、本文研究など様々な関連諸領域に寄与し得るものであることを提示した点にある。

従来、日本において「人間」の〈ヒト〉の意味が一般化するのは近世以降とされ、その意味での初出例は『今昔物語集』とされてきた。これに対して、第一章では初出例が空海の『性霊集』の「絶人間之腸」に遡ることを指摘している。さらに空海のこの表現の背景には、唐の不空の「人間之骸」「人間葬所」があり、空海が師事した恵果の師であった不空の表現に倣ったのではないかと推測している。初出の指摘は貴重であるが、不空の「人間」については、〈ヒト〉ではなく〈天上界に対する人間界（およびその人々）〉と解すべきであり、空海の典拠となり得る表現とは考え難いという指摘があった。また、言語表現レベルで不空と空海の影響関係を立証するには、実証面でも論理的な面でも不十分であることも指摘された。

第二章は、平安時代以降の様々なジャンルの古典文学作品に見える「人間」を網羅的に調査し、「人間」が用いられないもの、〈世の中〉の意味のみで用いられているもの、身体語彙と組み合わせて用いられることで〈ヒト〉の意味が引き出されて用いられているものなどの諸特徴が、作品のジャンルや文体と関連する可能性を指摘している。これは第三章以降に展開される、各文献における「人間」の意味と歴史的・文化的事情との相関性の論述の基礎をなすものである。また、室町物語の『鴉鷺物語』『伊吹童子』『俵藤太物語』に〈ヒト〉を表す「人間」の用例が数多く見られることを指摘しているが、〈ヒト〉の用法が一般化するのは、近世に入ってからと考えられてきた従来の見解よりも以前に一般化していた可能性を示している。これらは、網羅的な調査という単純であるが、膨大な作業に負うところが大きく、語誌研究という研究領域の成果としては、見本的な労作と評価できる。

第三章では、模範文例集として参照された「安居院集」に対して、現場講義の手控えの性格を有する、弁暁による「口頭詞章」が記された「弁暁説草」などの口語的要素という伝達目的やスタイルの異なる唱導資料を比較し、各々に見られる「人間」の意味用法の違いを検討する。そして「安居院集」の「人間」は「天上」に対する〈人間界〉の意味用法がほとんどであるのに対して、「説草」類では「人間」と「人間界」との使い分けが見られ、「人間」は〈ヒト〉の意味と解釈できる、とその相違を指摘する。「安居院集」に「人間界」は見られないことから、「説草」では口頭で説教するためにより意味を明示しやすい「人間界」が採用され、そこから逆に「人間」における〈ヒト〉の意味が強く引き出された、と解釈する。身体語彙との組み合わせだけでなく、語構成意識から意味変化が起きたとする指摘は興味深い。また唱導資料でも口語的な「説草」で使用されていたという指摘は、コミュニケーション史的な観点から〈ヒト〉を意味する「人間」の用法の広がりを考察するための端緒となるものであり、意味変化のみならずその広がりを資料の伝達目的やスタイルの違いから跡付けた功績は高く評価できる。

第四章では、道元が『正法眼蔵』が彼の言語観に基く実践として、「人間」における〈世の中〉と〈この世に住む（ヒト）〉という意味を分離し、別形式として明示しようとしていたことを指摘している。道元は漢語サ変動詞の多用に象徴されるように、概念を形式によって出来るだけ明示しようとしたが、その実践の一環としての〈ヒト〉の意味の表現方法を複数の例によって示している。空海における表現上の要請とも通じるが、それをさらに意識化した言語観の要請にもとづく実践が、意味変化のきっかけになり得る可能性を指摘している。

第五章では、仏教説話集の『宝物集』の「人間」の意味を検討し、〈ヒト〉の用法が確認できることが、文献における本文の先後関係を推定する指標たり得ることを示している。『宝物集』三巻本だけに見える「人間ノ習」という表現は、覚一本『平家物語』や『とはずがたり』などにも見えるものである。これだけでは、〈世の中〉か〈ヒト〉か、明確ではないが、文脈をよく検討すると、ヒトの性質に近い意味で解釈できることが明らかになる。三巻本は、平康頼が生存していた当時のものでなく、覚一本『平家物語』や『とはずがたり』と近い時代のものではないか、と解釈している。語の意味という指標が、文献学における本文研究に寄与し得ることを提示したという点で価値ある論考である。

第六章では軍記物語、特に『平家物語』の延慶本と覚一本における「人間」を比較検討し、成立文化圏や文体が語の意味用法と関連していることを明らかにしている。寺院文化圏と関係の深い延慶本では、〈天上界に対する人間界〉を唱導資料と同様、「人間界」としているが、「人間」という語自体に〈ヒト〉の意味を確認できない。一方、覚一本における「人間」は、〈ヒト〉の本性を生き生きと描写するために用いられており、文体的要請にもとづいて〈ヒト〉の意味が顕在化されているのだと解釈している。

本論文で明らかにされたのは、いずれも「人間」という語の言語変化の契機であり、変化が定着した体系的な要因の究明は、今後の課題として残されている。ただし、網羅的調査と膨大な用例の解釈によって、言語変化の契機とその歴史的文化的諸要因を明らかにしたことは、それ自体高く評価できるものである。よって、本学位申請論文は、奈良女子大学博士（文学）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。